

山口誓子と富士山

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西山, 春文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5171

山口誓子と富士山

西山春文

はじめに

山口誓子には、山岳を扱った俳句作品が多い。中でも、富士山を句材とした作品数の多さは特筆に値する。「富士山」・「富士」・「富岳」あるいは「宝永山」と詠み込まれた作品だけでも、百三十句を越える。この他に、「富士山行」という前書きを持つ句もあり、その数だけでも彼の富士山に寄せる思いが並々ならぬものであることが想像できよう。

では、その思いは具体的にはどのようなものだったのだろうか。また、彼の富士山詠にはどのような特徴があるのだろうか。誓子と富士山について考察を進めていきたい。

一

誓子は、「自叙伝」(『俳句』角川書店、昭和四十四年十一月所収)に次のように記している。

祖父は病のために籠居してゐるが、若し宰相山の啼魚邸(註)を訪れ、そこに蒐集されてゐる書画を見たら、書画骨董の好きだった祖父はきつと喜んだにちがひない。父の家には、寂巖の屏風・鉄斎の富嶽図・佐伯祐三の鯖があつた。

祖父は当然良寛の話をしただらう。それに祖父は京都時代に鉄斎と交つてゐたから、富嶽図を見て、鉄斎の話をしただらう。

その富嶽図を私はよく見て、よくおぼえてゐる。鋭角の富士山を描いたものだ。宝永山が左に出張つてゐるから、山中湖側から見た富士山である。鉄斎は明治八年、四十歳ではじめて富士山に登つたが、それ以来晩年に至るまで多くの富嶽図を描いた。

私はこの頃、富士山に取り憑かれ、いくつもある登山口からお中道ラインまで登つてゐるが、私を富士山へ誘つたそもそもは鉄斎の富嶽図かも知れぬ。

彼は、大正十五年五月から浅井啼魚邸で行われていた水無月會に出席している。啼魚の令嬢・梅子(俳号は波津女)と婚約するのが昭和三年五月。この期間のいずこかで、富岡鉄斎の富嶽図を見、富士山に心惹かれるようになったものと考えられる。

だが、この文章を草した昭和四十四年の時点では、いまだ富士山登頂を果たしてはいない。この時点までの彼の著述の中から富士登山の記録を拾ってみよう。

昭和四十二年（六十七歳）

七月 箱根、芦の湖、山中湖、河口湖、富士山五合目、山中湖、箱根遍遊。

十月 箱根、富士宮より富士山五合目行。須走口より新五合目行。

昭和四十三年（六十八歳）

五月 箱根より河口湖に到り、スバルラインを富士山五合目まで登る。西湖、精進湖、本栖湖、田貫湖を経て箱根に戻る。

七月 箱根より河口湖に到り、スバルラインを富士山五合目に登る。鳴沢氷穴、人穴、御坂峠、御坂町夏目原より引返し、山中湖をめぐる箱根に戻る。

九月 箱根より河口湖に到り、スバルラインを富士山五合目に登り、御庭より御中道を大沢へ。猿橋、昇仙峡。人穴より上井出林道に入り、大沢崩れの裾を見て、富士宮より箱根に戻る。

（以上句集『一隅』所収年譜より）

昭和四十四年（六十九歳）

七月 河口湖より富士山五合目に登り、精進湖登山道を下る。

（以上、句集『不動』所収年譜より）

古稀を目前に控え、執拗に富士山五合目まで登っているのが分かる。しかも、敢えて様々なルートを選び登山、あるいは下山している。

富士山について触れた最も古い時期の記述は、『秀句の鑑賞』(昭和十五年、三省堂刊、『俳句研究』に昭和十四年三月から九月まで連載した記事を収録)に見出される。

雪の不二藁屋一つにかくれけり 湊水

裾野から仰ぎ見る富士山は、まことにおほらかで神々しい。

それは裾野から急に空高く隆起した神体とも見られるのである。冬になつて富士が雪に蔽はれると、その感じは一層痛切である。

ところが、富士山に対する作者の位置を漸次後退させてゆくと、富士は次第に低くなり、その神々しさは次第に薄らぎ、やがて風景のなかの一つの「もの」となつてしまふ。富士は祭壇から降りて、低山の間にはさまれたり、街道の松の下に置かれたりする。

こゝに見えるのも遠景としての雪の富士である。山は極めて低く小さく見えるが、そのかはり見ゆる限りは雪白である。深いほど雪白である。

その雪の富士を眺めながら、道をゆくと、行手に一軒の藁屋が現れ、それが富士と作者との間に這入り込んでしまった。雪の富士は、その為に見窄らしい一軒の藁屋のうしろに隠れてしまったのである。富士は、その片影すら示さず、完全に隠れてしまったのである。

遠景になると、雪の富士は藁屋一つにも隠される。

「不二」といふ字は形象的なはたらきを持つてゐるし、「藁屋一つ」も粉飾が無くていゝ。

なほこの句は、私のやうに作者を移動させなくても、「雪の不二が藁屋一つにかくれてゐる」という風に、眼前瞬間のことと解釈出来ないこともないが、それでは、中学の容器画で教わつた透視図めくし、それに「かくれけり」といふ詠嘆も利いて来ない。

作者湍水は尾張の人である。

先人の句の鑑賞でありながら、当時の誓子が富士山をどのように捉えていたかが見て取れる興味深い文章である。

彼はまず、「仰ぎ見る富士山」を「神々しい」「神体」と捉えている。だが、ズームアウトして遠景となつた富士山は単なる「もの」だという。さらに、作者と「藁屋一つ」と「不二」を、移動する関係性の中に捉え、その構図に重点を置いて解釈している。また、「容器画」「透視図」という美術用語を用いて鑑賞していることから、彼にとって富士山は、「神体」である一方、一枚の絵画を描くこととくに俳句の構成を考えるための格好の素材であつたことが理解できるのである。

この点を、富士山を扱つた同時期の具体的作品に基づいて考えることにしたい。左記の作品は『夜月集』（昭和十四年五月、第一書房刊）に収録された十九句である。

雪岳抄

長尾峠

山口誓子と富士山

隧道の口雪白の富士塞がる

雪の富士外輪の外に出てて見ぬ

雪被つつ寶永山噴火口穢けれ

雪の富士雲高けれど翳を置く

雲ゆきて富士雪峯の裏を通る

裾野

富士の雪澤を下りつつ湖へ来る

富士の雪裾の端山にとどまれる

低き家ことごとく雪の富士をかぶる

雪の富士坂なす町を下りて過ぐ

裏富士

裏富士に雪すくなけれ湖は凍り

裏富士に雪嶺遠く退きたり

雪の富士墳墓かたまる上に簪つ

雪の富士あな低し甲斐の國に入り

天上に白日と富士の雪嶺あり

富士を周り黒きマスクを外さざる

富士の雪垂れて八百八澤に入る

富士を周り冬日傾くところに着く

秩父丸

雪の富士荒浪を敷き隔てたり

船揺れて雪の富岳と訣れ去る

これらの作品の大半は、富士山自体を描出することはない。かといって、富士を見ての何らかの感動を伝えることもしない。誓子は、作者と富士山、あるいは富士山ともう一つの対象の関係性を五七五で表現することに腐心しているのである。そのため、「外に」「高けれど」「裏」「下りつつ」「下りて」「低き」「低し」「上に」「遠く」「周り」といった、場所や位置関係を指示する語句が頻繁に使われている。先の湍水の句の鑑賞文に見られた当時の誓子の指向性が、実作において更に明確に示されていると言えるだろう。

さらに、湍水の句に見出した移動する視線を、句作時に自ら適用せんと試みている。このことが、平板な静止画としての富士の写生を拒み、富士山ともう一つの対象を何らかの動きある構図の中で描出するという結果を招いているのである。

二

誓子の富士山を見る眼の二面性（神山として仰ぐ一方、距離を置いた場合には単なる「もの」として見る）については既に触れたが、ここでその見方についてさらに詳しく見ておくことにしたい。

山口誓子と富士山

左に掲げるのは、「山姿」(『文藝春秋』昭和十六年二月)と題された随想の一節である。「強羅から富士山は見えない。しかし、足を運べば、見える地点が二箇所ある。」と記し、その「二箇所」を紹介しつつも、その一箇所から見える富士山は「意気頗る揚らざる姿」、もう一箇所からは「一層意気鎮沈して、富士山の名譽の為には却て見ない方がいいかららるだ。」と言う。その後にくく文章である。

或る日、私は所用があつて、元箱根まで通しのバスで行つたことがあつた。(中略)気がつくと、その(西山注、「金時山」を指す)上に富士山がすつくと立つてゐる。バスの窓に顔を寄せて見てゐるうちにも、富士山は、バスの前に立つたり、後に立つたり、絶えずその位置を変へたが、常に巍然として、天の真洞に聳え、雪の髯をおのが身に深く刻んでゐた。私は飽かずその富士山を眺め、恵まれたその日を祝福した。

やがてバスは、湖を右手に見下ろしながら湖尻へ下りて行つた。(中略)この道路を行くこと半ばにして、私はそれまで見失つてゐた富士山を取り戻した。

富士山は思ひがけないことに天上に屹立してゐた。仙石の富士を巍然と形容した私は、眼前の富士を形容する言葉を知らなかつた。富士山の頂上は、天に間へ、まるで天を支ふる柱のやうであつた。まさに青雲梯であつた。鉄斎画くところの、上すばまりの富岳図は、まことに私を欺かなかつたのである。そんな富士山を私は、何処からも見たことはなかつた。こちらの道路の位置と外輪山の位置との関係から、さういふ天柱のやうな感じが生じたにちがひなかつた。私はその日を恵まれた日とする念を更に強うしたのであつた。

筆を抑えた写生文でありながら、富士山に出会えた喜びの伝わる一節である。またここには、富士山を一種の造形と

見る誓子の眼がある。かつて啼魚邸で見た鉄斎の富嶽図。その鋭角の富士山を眼前の富士に重ねているのである。さらに、「鉄斎画くところの、上すばまりの富岳図」を目前に現出せしめた位置関係にまで思いは及んでいる。

実は、彼は以前から、絵画に描かれた富士山が頂角であることに関心を寄せている。たとえば、「宰相山雜記（一）」（『信濃毎日新聞』昭和十五年五月）の「1、富士」は、「太宰治氏の『富嶽百景』はいい小説である。いきなり、富士の頂角のことが出て来るので面喰ふ。」と書き起こされる。この随想では、太宰の文章を引きながら、絵画に描かれた富士の大方は現実のそれよりも鋭角であることに触れ、現実には鋭角に近い富士を眺めるためのビューポイントを紹介している。そして、本文章は次のように結ばれる。「富士山を誇張するのは、画家のデフォルマシオン（歪形）ばかりではない。日本人の身最良もあるのである。異常な親日家であつたモースもまたはじめは富士山を誇張したのであつた。」
観察者と富士山の現実的位置関係と富士山を表現する主体の心理によつて、描き出される富士山像が異なってくる様子を冷静に考察している誓子がいる。富士山の見方とその表現については、後年さらなる考察を巡らしている。

三

次に掲げるのは、「富士山の名画——北斎と鉄斎——」と題された講演録（『天狼』昭和五十六年三月号に「冬のキャンプ講演録」として収録）である。少々長くなるが引用してみよう。

「富士三十六景」——これが北斎の傑作と言はれてをりますが、就中二つの絵です。一つは「凱風快晴」——凱風といふのは南風。南の風が吹いて、富士山が晴れてゐるのです。もう一つは「山下白雨」——白雨といふのは御

承知のやうに夕立。富士山の下が夕立で、稲光がキラキラ光つてゐます。

「富士三十六景」の中でもこの「凱風快晴」と「山下白雨」が北斎の傑作であります。

この絵を見ますと、富士山の先が尖つてゐるのです。角度からいひますと、鋭角の富士山です。これを見てすぐ解るやうに、これは写生をした富士山ではありません。（中略）

しかし、北斎の描いた富士山を見てをりますと、富士山の感じが非常によく出てゐます。

富士山は、秀麗な山——崇高な山——と言はれてをりますが、北斎の富士山は、その秀麗の「秀」の感じをよく出してゐます。それから、崇高の「高」の感じ、高い感じもよく出してゐます。これは一口に言ひますと、北斎が富士山をよく見て、富士山と一体になつて、その富士山を通じて自分をうち出したのです。富士山を通じて自分を打ち出したので、富士山は變形されてをります。「北斎の富士」になつて變形されてをります。絵の方でデフォルメといふことを言ひますが、デフォルメされてゐるのです。これが北斎の富士の名画の解説ですが、これは絵だけでなく、俳句の場合もかうならなければならぬのです。（中略）

鉄斎は南画家として山水画を得意としてをりましたが、南画で山水を描くときには「胸中山水」を描くと言ひます。

つまり、画家の胸の中にある山水を描くのです。「胸中山水」といふのは、画家が山水をよく見て、山水と一体となつたときにその山水が、その画家の山水になるわけです。鉄斎が山水を描くときにはさういふ「胸中山水」を描いてゐたのです。

鉄斎は「胸中山水」のことを「其の形似に倣はずして——形を似せないで——其の精神を發揮す」と書いてをります。写生はするけれども、写生にとらはれずに、自分の精神を發揮するといふのです。

かつて浅井啼魚邸で見た鉄斎の富嶽図によって富士山に心惹かれ、現実の富士山と鉄斎の、そして北斎の描いた富士山を比べて思考し続けてきた結果がここに要約されていよう。写生から出発しながらも対象と一体となって「自分の精神を発揮する」こと。その結果、表現された対象はデフォルメされたものとなる。まさに、誓子とその主宰誌「天狼」の目指す俳句観が具体的に説明されている。本講演録には、対象の見方と表現法についてもう一つの眼目が示唆されている。引用を続けたい。

南画の画論に「山水を描くに三遠の法あり」といふことがあるのです。三遠とは「高遠」「深遠」「平遠」ですが、「高遠」といふのは、山の麓から山の頂上を仰ぐときには「高遠」の筆法で描く。「深遠」といふのは、前からその後ろを窺ふときには「深遠」といふ筆法で描く。「平遠」といふのは、遠くまで見渡すときには、「平遠」といふ筆法で描くのです。

今問題になりますのは「高遠」です。富士山を描くときにはどうしても「高遠」の法が必要です。富士山の麓から山頂を遙かに仰ぎ見て描くと、富士山の先が尖つて来て、鋭角の富士山になるのです。

北斎の影響もあつたでせうが、鉄斎は南画家として「胸中山水」を描き、「高遠」といふ筆法で富士山を描いたのです。だから鉄斎の独自の富士山になつたのです。

「胸中山水」は俳句の場合も同じだと思ふのです。私たち天狼の作家はみな、自然を詠うときには、胸中の自然、作家の胸の中にある自然を詠ふのです。それから、今の「高遠」をデフォルメと考へれば、私たちがさういうデフォルメをやつてゐるのです。

彼の句作に南画の「三遠」の法が応用されていたことは大変興味深い。また、北斎・鉄斎の描く富士山が鋭角であった理由を「高遠」という筆法によるものと説明している点も俳人・誓子ならではの視点によるものということができらうだろう。

四

では、その後の誓子の富士登山の足跡を辿ってみることにしよう。

昭和四十五年（七十歳）

九月 富士山五合目より宝永山に登る。表富士周遊道路を太郎坊まで行きて引返し、十里木ドライブウェイを経て清水次郎長開墾地をたづね、浅間神社に詣つ。本栖湖を経て身延山行。

昭和四十六年（七十一歳）

九月 富士山頂行。

昭和四十七年（七十二歳）

六月 富士山頂行。

（以上、句集『不動』所収年譜より）

昭和四十九年（七十四歳）

八月 富士山頂に句碑建つ。

(以上『山口誓子全集第十卷』年譜より)

平成五年(九十二歳)

二月 富士山行。忍野村、河口湖等を巡る。

(以上、句集『新撰大洋』所収年譜より)

昭和四十六年・四十七年と二年続けて富士登頂を果たしている。その最初の登頂について彼は次のように記している。

九月、多年の念願だった富士山頂行を果たすことが出来た。吉田北舟子、伊藤霜楓氏のお蔭である。

太郎坊より登った。私は昔の、富士講者となり、富士講者の眼を以て頂上を見た。

富士火口肉がめくられて八蓮華

富士講者火口へ尖る岩拝む

富士の壺開きて隠すものもなし

富士山頂蟻の門渡りより崩る

お鉢廻りの途中、吉田登山道を見下して作った。

下界まで断崖富士の壁に立つ

の句が後に句碑となった。測候所の裏、大沢崩れの近くに立つてゐる。私の句碑の中では、最高処に立つ句碑である。(『不動』後記、前出)

続く二度目の登頂についての記述は次の通り。

六月、再び富士山頂行。このたびも太郎坊から登った。

山頂にいた虻は私にとまつた。

富士山の残雪は解け、水分を含んでなめらかだった。それを富士講者の眼で眺めた。

雪の肌なめらか富士は女体なり(同右)

これらの記録で特筆すべきことの第一点は、二度とも「富士講者の眼」で富士頂上を見たこと記している点である。登頂の前年発表の文章に「高い山に登るのは、その頂上を極めて四方を眺め見渡すためである。その山頂からは私の今まで知らなかった大きな視野が展開される。私はそれを俳句の眼で見ようとするのだ。『旅寝論』に芭蕉が『はいかいの眼にて睨み出し』たと書いてある。現代の私なら『俳句の眼にて睨み出す』というべきところである。／＼高い山の代表は富士山にきまつている。」「(高い山から)、『心情公論』昭和四十五年十月」と記しており、本来ならば、登頂後の回想にも「俳句の眼」で頂上を見たこと強調すべきところだろう。それをあえて「富士講者の眼」と説いているのである。

実は哲子は、常に旅に先だつてその準備を周到に整えている。たとえば、昭和四十三年五月の富士山五合目行の際には、「富士山行に僧在融の『不二日記』を携へて行つた。天保十四年に書かれた本だ。在融のこと、調べたがよくわからない。芝増上寺の僧とのみ。」と記しているように、常に当地に関する歴史的、地理的調査を綿密に行つてから出発している。「俳句の眼」で見て、詩想を喚起し、「胸中の自然、作家の胸の中にある自然」を詠うための土台作りを予め行っていたのであろう。富士登頂に際しても、「昨年、富士登山をしまして、山頂をきわめました。山開中は大変な人

出ですので、閉山してから登りました。そのとき富士講のことをよく調べていった」「俳句と画・よもやまばなし」山本健吉との対談、『日本美術』昭和四十七年八月）と報告している。その結果、特筆すべき二つめの点が導き出されたのである。それは、富士講者に倣い、富士山を女体として眺めているという点である。このことは、同対談の中にも示される。

富士講は富士の火口を女体、すなわち女性の肉体だとして、それを信仰しているわけですね。火口の縁に富士講の拝所があるのですが、そこをこつぼのぞきというのです。富士の火口を子宮と見ているわけですね。そのことを知ったものですから、ふつうは山頂とかお頂上などを季語にして詠むところを、富士の壺という季語で句を作ってみました。（同右）

第一回の登頂についての記述に挿入された四句、すなわち

富士火口肉がめくれて八蓮華

富士講者火口へ尖る岩拝む

富士の壺開きて隠すものもなし

富士山頂蟻の門渡りより崩る

といった作品は、確かに富士の女体信仰が下敷きになって初めて句作可能なものであるし、そのことを知ってこそ正しく鑑賞できるものと言えるだろう。この時の同時作に、

山を閉ち社を閉ち神はましまさず

富士山頂千木高知りて神まさず

といった句もあり、神山としての富士へ寄せる思いよりも、富士講者の一人としての実感のほうが強かったことが見て取れるのである。

ここで、富士登頂時の俳句作品を見ておきたいが、やっかいな問題が一つある。第一回の富士登頂は昭和四十六年である。当時の作品は句集『不動』（昭和五十二年五月、春秋社刊）に収録されているのだが、当句集では富士山頂を詠じた作品が昭和四十五年に区分されているのである。が、昭和四十五年には、誓子はまだ富士山頂をきわめてはいない。続く昭和四十六年の項にも富士山頂上を扱った作品が収められている。その中の「富士山頂吾が手の甲に蠅とまる」は、先に引用した昭和四十七年の二回目の登頂についての記述、「六月、再び富士山頂行。このたびも太郎坊から登つた。／山頂にいた蠅は私にとまつた。」に符合する。つまり、『不動』編纂時のミスにより、それぞれ一年ずつ前年へずれて収録されてしまったと考えるのが最も自然と思われるのである。^(佐)では、二度の富士登頂時の作品を掲げてみたい。

第一回登頂時（昭和四十六年）作品（『不動』では、昭和四十五年の項に収録）

富士山行

富士山

吾も富士講早発ちの低日輪

草の絮優遊富士の大斜面

富士風薊に絮を残さざる

眼ある者見よ火口にも草紅葉

富士講者には二子山双乳房

誰が為に登山の女人梳る

富士登る吾に連山爪立ちて

高さより砂走りの道始まれり

富士の壺開きて隠すものもなし

富士山頂蟻の門渡りより崩る

下界まで断崖富士の壁に立つ

山を閉ぢ社を閉ぢ神はましまさず

富士山頂千木高知りて神まさず

第二回登頂時（昭和四十七年）作品『不動』では、昭和四十六年の項に収録）

富士山行

富士山

四時起きに残雪の富士起きゐたり

山小屋に寝たり丸太を枕とし

残雪の富士吾が登る道を空け

山口誓子と富士山

雲海に煙を加ふ煙草喫ひ

残雪を富士の高きに墜らしめず

富士の高きに残雪の切通し

十里飛び来て山頂に蠅とまる

富士山頂吾が手の甲に蠅とまる

奥宮に雪あり神の来ますまで

稀れびとの吾れ山開き前に来て

火口棚雪が残りて白栈敷

富士山を覆ひし雪の残に触る

火口壁大き氷柱が柵をなす

願はくは火口の氷柱折らせ給へ

雪がまだ閉させり賀久夜比売の巖

全山の雪解水富士下りゆく(注)

ここで問題になるのは、季語の扱いである。彼自身は、早期から「富士山と云はず、機械にしてからが、春・夏・秋・冬を抜きにしてはかんがへられない。」(「詩人の視線」『ホトトギス』昭和八年四月所収)と主張し、有季定型を墨守しつつ、句材の拡大を図ってきた。

一方、富士山関連の季語としては、富士詣が旧暦六月一日に行われてきたところから、「富士詣」「富士講」はもとよ

り、「山上」「お頂上」「富士行」「富士小屋」等が夏の季語とされる。誓子はこれらの季語を用いたり、あるいは、現実に目にしたものをたとえ登頂した季節の季語ではなくても取り入れたりしている。また、過去の歳時記に収められてきた既成の語を用いずに、「富士登る」「下界まで断崖富士の壁に立つ」というように語句として、あるいは一句全体から「富士詣」や「登山」を連想させ、季感を伝えるような工夫を凝らしている。つまり、旧来の季語を優先した句作法ではなく、あくまでも誓子の肉眼が捉えた景と、それによってできあがった「胸中の自然」を重視し、そこに季感も託そうとしているのである。そのため、場合によっては、「富士の壺開きて隠すものもなし」という句のように、一見無季と思われる句を作りもしているのである。本句についての彼の思いは、先の山本健吉との対談で述べられているので、その続きを引いてみよう。

山口 ところが発表してみますと、富士の壺というのがわかってもらえないのです。なぜ火口のことを壺というか……。『富士の壺』というのを季語として使ったのですが、これは先へいって季語として採りあげてもらえるでしょうか。

山本 富士山を女体とみて、火口を子壺とみる見解が一般的に知られるようになれば、歳時記にも採り上げられるでしょうが……

山口 火口を子壺とみるのは、富士講がそう考えていたのですが、今日では富士講はすたれましたね。

山本 山登りもいまはスポーツになってますから。

山口 『富士の壺』が歳時記にのるのはちょっとむりでしょうかね。

山本 ちょっと説明を要しますからね。

(中略)

山本 俳句の場合、例句がないと季節としての資格はまだない、ということとは原則としては私は納得するわけですが、例句のないときに、こういういい言葉があるじゃないかというので歳時記の中に入れておきますと、それをみて作ってくださる作家があります。「青葉潮」「乗込鮎のつみかぎな」「雪代山女ゆきしろやまめ」「釣瓶落し」「夜話」「教え日」など……。それなら何もはつきり季節として未だ一般に認識されていなくても、どんどん作られたらいいと思いますすけれどね……。

山口 やはり歳時記にないと季節にならないという気があるのでしようね。

山本 そういう点では歳時記というのは益をなしてるのか害なのか。(笑)

「富士講」自体は廃れたが、過去の風習として認知され、季語として生き続けている。ところが、肝心の「富士講」の信仰内容の詳細はもはや理解されていない。そのため、哲子が「富士の壺」という言葉に託した思いを一般の読者は理解できようはずがない。特に俳句入門者の場合には歳時記を読み、季語を覚えつつ句作していくのが普通であるため、実体験としての季節よりも歳時記上の季語が優先されるという重要な問題がここに潜んでいる。いずれにしてもひとときわ勉強家であった俳人哲子の知識・体験と読者の見識との相違が、新たな季語の定着を拒んだ興味深いエピソードである。

五

誓子が富士登山に関して繰り返し述べていることの一つに、登山者の年齢の問題がある。「私は昨年九月、富士山に登って頂上を極めた。そのとき、かつて富士の山頂を極めた人々の年齢を調べた。」(「高嶺と高齡」、『毎日新聞』昭和四十七年一月四日)と記し、池大雅が二十七歳・三十八歳・三十九歳で、富岡鉄斎は四十歳・六十歳の時とさらにもう一回(年齢不詳)、書家・中林梧竹に至っては、七十二歳・八十歳で登ったという事実を紹介し、「だから、私ももう一度富士山へ登ってみたい。」と書いている。この時、誓子は満七十歳。富士山と、富士山に魅了された先人達を思い、一表現者として独自の富士を何度でも描きたかったに違いない。

誓子には、こうした富士登山、あるいは裾野めぐりの際の「高遠」に基づく作品のみならず、「平遠」の富士山詠も多い。たとえば、次のような句である。

日本の霞める中に富士霞む (昭和五十九年、『紅日』所収)

鯉幟富士の裾野に尾を垂らす (昭和六十年、同右)

残雪の富士は版画の富士となる (昭和六十一年、同右)

富士裾野桜並木の川があり (昭和六十三年、『新撰大洋』所収)

雪の富士製紙の煙手を挙げる (平成二年、同右)

これらは、昭和四十五年九月から「朝日俳壇」の選句のために東京に通ったことによるものと思われる。新幹線の車窓から見た富士山詠の数は夥しい。いかに富士に惹かれていたかの証となろう。

そして、晩年最後の旅行も富士山裾野めぐりであった。その旅行に同行した佐竹紘栄氏の「山口誓子先生と富士山」(『佐渡郷土文化』平成六年十月)からその貴重な記録の一部を借用したい。

平成五年二月二十五日(木)、誓子先生は本栖湖畔で、五千円札の裏の写真と同じ富士山を望む茶房で一服され、富士山写真集(私が差し上げていたのをわざわざ持参され)を開かれて「この写真と一緒に富士山だよ」と確認された。

夕方、忍野のホテル鐘山苑の八階の角部屋から、富士見の窓一杯に聳つ大きい忍野の富士山と対峙された。

翌二十六日午前十一時過ぎ、先生の部屋へ伺うと、近々と聳つ雪の忍野富士と対峙され、句帳を開かれていた。

「この写真(富士山写真集)と一緒に富士山だよ。忍野の富士はいいねえ、沢山俳句を作ったよ」と喜ばれた。(中略)

二月二十七日早朝、河口湖第一ホテルの前の湖面に、逆さ富士が聳っていた。逆さ富士が聳つのは奇遇と聞き、先生にも是非ご覧いただきたいと、ご起床がいつも十時半の先生を、杉いとがさんと私は意を決して「先生、逆さ富士が綺麗です」と、お越し申し上げた。先生は午前八時過ぎの逆さ富士に「おお」と、感嘆の声をあげられた。

この旅行の収穫は次の五句。

春の富士山

解けし雪富士山落り八海に

富士山の春は青樹ヶ原で知る

未だ開かざる富士山にお助け小屋

枝垂雪にて富士山の起伏知る

残る雪にて五合目の白線引く

この五句は、平成六年三月二十七日『朝日新聞』朝刊に、誓子の計報と共に掲載されたのである。

終わりに

島村正氏は、誓子追悼文を「誓子の『胸中に成竹』、否、『胸中に富士あり』が、畢生のテーマであった。」（「富士山と誓子」、『俳壇』平成六年六月）と締めくくっているが、誓子の俳句の歩みには、まさに富士山への思いが常に同道していたと言えるだろう。

また、富士山に関する先学の絵画・論考を丹念に眺め、読む中から、物の見方・描写法を学び取り、それを句作に実践してきた。これは必ずしも富士山を句材とする場合に限らず、彼の俳句観の根底にまで影響を及ぼしたということが出来る。本論で俯瞰してきた通り、対象と作者と表現、これらを意識的に区別して近代俳句の方法を構築したのである。その際、富士山との出会いが果たした役割は大きかった。対象から喚起された、作者の「胸中の自然」を読者に伝

えるための最適な構成を工夫する。その時にデフォルメや三遠という方法が有効であった。彼の俳句の構成法には、映画論から得たところが大きいことは度々指摘されてきている。だが、それと同時に、富士山という大きな対象を俳句という最短詩型で表現する工夫の中から得たものが、そこへ大きく関与していたことも想像に難くない。

誓子が富士山に憧れ、晩年まで富士登山を希求していた意味の一つもここにある。

注

- (1) 啼魚とは、誓子の妻・波津女の父・浅井義嗣(よしてる)の俳号。
- (2) 後に誓子は、「この夏頃から身体に違和を感じ、会社を欠勤すること数ヵ月に及んだ。十一月、静養のために箱根強羅に滞在し、秋桜子と大浦谷・仙石原に遊んだ。」と記し、さらに「雪の富士墳墓かたまる上に聳つ」の句について、「これが最初の箱根行である。『雪の富士』の句には病の翳が濃い。」(『誓子俳話』昭和四十七年十一月刊所収「雪の富士」、初出不明)と回想している。
- (3) 誓子没後に編まれた『季題別山口誓子全句集』(一九九八年十二月、本阿弥書店刊)もこの誤りをそのまま踏襲している。
- (4) 『不動』後記にある「雪の肌なめらか富士は女体なり」は本項には未収録。

(にしやま・はるふみ 商学部助教授)